

# 書評 佐原徹哉著 『ボスニア内戦 グローバリゼーションとカオスの民族化 』

著者	久保 慶一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジア経済
巻	50
号	5
ページ	86-92
発行年	2009-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00007173">http://hdl.handle.net/2344/00007173</a>

佐原徹哉著

『ボスニア内戦——グローバリゼーションとカオスの民族化——』

有志舎 2008年 6+443+5ページ

くほけいいち  
久保慶一

I

本書は、バルカン近現代史を専門とする著者による、ボスニア内戦の残虐行為の分析を目的とした著作である。著者が「はじめに」で述べているように、内戦における残虐行為の実態は、内戦発生の政治的メカニズムや国際関係、文化的背景などといったテーマに比べると、ボスニア内戦研究のなかであまり人気のないテーマであった。ひとつには、著者自身が述べているように、残虐行為を振りかえることは決して愉快的なことではなく、その検証は、現地の人々にとっては「悪夢を穿かえされる」ことになるため、外部の研究者が正面から取り上げにくいという事情がある。それに加えて、複雑に戦況が変化し、4年という長期間にわたって続いたボスニア内戦においては、行われた残虐行為は数え切れないほどあり、その実像を明らかにするには途方もない量の資料を読み込む気の遠くなるような作業が必要である。本書はこうした困難なテーマに正面から立ち向かっており、旧ユーゴ地域研究、内戦研究において重要な貢献をなしている。

本書を読み進めていくなかで、ボスニア内戦の事情にそれほど通じていない読者は、その固有名詞の多さに圧倒されるかもしれない。しかし本書の最終章まで読み終えると、それが著者のおそらく意図的な戦略であるということに気づくであろう。本書の目的は、単に戦争の実態を明らかにするという記述的なものにとどまらず、ボスニア内戦の本質について明確なメッセージを読者に伝えることにある。それは、ボスニア内戦における残虐行為はじつにさま

ざまな諸要因の絡み合いによって引き起こされており、それを「民族間の」対立・紛争として説明してしまうのは間違っているということである。それを示すためには、残虐行為の主体を匿名の「民族集団」で済ませてしまうことはできない。残虐行為の主体を個人名や団体名などの固有名詞で記述することは、本書で展開されるボスニア内戦の本質についての議論にとって、決定的に重要なのである。

やや結論を先取りしてしまった感があるが、以下では、本書の内容についてまず概観していくことにしよう。本書は、8つの章によって構成されている。その内容は以下のとおりである。

ボスニア内戦と民族浄化——はじめに——

- I ボスニア内戦の歴史的背景
  - II 虐殺の記憶
  - III 冷戦からグローバリゼーションへ
  - IV ユーゴ解体——「グローバリゼーション」の戦争——
  - V 内戦勃発
  - VI 民族浄化
  - VII ジェノサイド
  - VIII ボスニア内戦のメカニズム
- あとがきにかえて——戦後のボスニアとジェノサイド言説——

II

第I章では、近代初期から第2次大戦勃発前夜までの歴史が概観され、ボスニアにおける主要3民族——ボスニア人、セルビア人、クロアチア人——の民族意識の形成過程が明らかにされる。ボスニアの3つの民族は19世紀後半から20世紀直前にかけて集団意識を整えたが、著者によれば、その特徴は、3つの集団意識がいずれも外からの刺激によって形成されたことと、社会経済的対立によって差異化が促進されたことである。この2つの点は、現代ボスニアの内戦を分析する際にも重要な要因として指摘されることになる。

第II章では、第2次大戦中に旧ユーゴ地域で行われたさまざまな残虐行為が明らかにされる。ドイツ

軍によるセルビア人に対する残虐行為、ウスタシャ率いる「クロアチア独立国」域内で行われた虐殺行為、セルビア人軍人を中心とするユーゴ王国軍残党が結成した「チュトニク」による残虐行為、そして共産主義者が組織したバルチザンによる残虐行為などである。著者は本章の最後に、戦争後に樹立された社会主義体制は、こうした第2次大戦中の記憶を清算しないまま個人々の記憶を封印し、「バルチザンの英雄伝説によってカタルシスを施した」ことを指摘する。本書の第V章で明らかにされるように、こうして封印された過去の記憶は、社会主義体制の動揺とともに喚起され、政治利用されることになる。その意味で、本章は、ボスニア内戦の歴史的背景を理解するために重要なだけでなく、ボスニア内戦において利用されたさまざまなシンボルの意味を理解するためにも必要なのである。

第III章は、社会主義体制期の変遷が論じられ、1970年代に繁栄の頂点に達したユーゴが80年代に経済危機、政治危機に直面していく過程が分析される。本章において最も重要な主張は、ユーゴの統一性をチトーのカリスマ性によって説明するのは短絡的であり、国際政治と国内の政治・経済の絶妙なバランスと、冷戦構造を巧みに利用した独自の地位の確保が重要であったという点である。このことは、冷戦から「グローバリゼーション」への転換がもたらす矛盾を「最も早く、かつ極端に」経験しなければならないことを意味した。すなわち、第2次オイルショックによって短期資本の流入が止まると経済危機が顕在化し、追加融資に際してIMFから課せられた構造調整政策が国民生活を破綻させ、政治危機へとつながったのである。

第IV章では、1990年に実施された複数政党選挙から旧ユーゴ解体までの過程が明らかにされる。この選挙では民族主義政党が多くの共和国で権力を掌握したことがしばしば問題視されるが、著者は、問題の本質はそこにあるのではなく、選挙の時期や方法が連邦憲法その他の既存の法体系を無視する形で各共和国の独自判断で行われたため、法の支配が崩壊した点にあると指摘する。政治目標の異なる3つの民族政党が選挙で勝利したボスニアではとりわけ選

挙後の無法状態が甚だしかったことが、ボスニアの中央や地方のさまざまな具体例から明らかにされる。

第V章では、ボスニアの内戦勃発にいたる経緯が詳しく明らかにされる。まず第1節で、複数政党選挙の実施前後から「言論の自由」の名の下に過去の虐殺の記憶を蘇らせるさまざまなキャンペーンが行われたことが指摘される。第2節では、武器の調達や戦闘集団の組織化など、3つの民族主義政党が主導して行った戦争の準備の過程が明らかにされる。第3節では、ボスニア分割構想など、内戦前夜の3民族勢力間の政治交渉過程が、第4節ではボスニアの独立に関する国民投票の実施から内戦勃発にいたる過程が、そして第5節では内戦勃発から Dayton 合意にいたるまでの内戦の経緯が概観される。

100ページ以上にわたる第VI章は、本書の中心となる章であり、セルビア人、クロアチア人、ボスニア人の3民族勢力によるボスニア内戦中の残虐行為の実態を、旧ユーゴ戦犯法廷の証言や現地で刊行されている調査結果などの資料を参照しながら克明に明らかにする。著者はこの作業を通じて、ひとつの結論を提示する。すなわち、ボスニア内戦を戦った3つの集団が、いずれも同質の暴力を展開していたという点である。この3つの集団は、同じ言語を話し、同じメディアを受容し、同じ体制下で長くともに暮らしていた人々であり、政治指導者は共通の価値観をもち、軍事的に指導していた旧連邦軍出身者たちは軍事の専門家として教育を受けていた。3民族集団による暴力の同質性は、同一文化の産物であった。ここから著者は、ボスニア内戦は、異なる価値観をもつ民族集団同士の殺し合いではなく、同じ価値観と行動規範をもつ「市民」が混乱状態のなかで、互いのなかに他者を見出そうとした現象であったとし、そこにボスニア内戦のもつ現代的意味があると論じる。

第VII章は、ボスニア内戦の残虐行為のうち、規模、残忍さの上で他の事例を凌駕するスレブレニツァ事件について個別に分析した章である。スレブレニツァ事件は、旧ユーゴ国際戦犯法廷においてジェノサイド罪を適用した初めての事例となったが、著者は、抹殺の意図の立証を必要としない解釈が、法的レベ

ルでの問題処理を容易にした一方で、事件が発生した理由を未解明のまま残すことになっていると指摘する。本章は、スレブレニツァ事件の克明な記述と分析を通じて、スレブレニツァがなぜ組織的皆殺しの対象となったのか、スルプスカ共和国軍がなぜ数千人の人々を即時に処刑することにしたのか、といった数々の謎に対し、著者なりの答えを示すことを試みている。

第Ⅷ章は、ボスニア内戦において残虐行為を行った人々の実像を明らかにし、ボスニアの「市民」たちが「殺し合い」に参加していったメカニズムを分析する。そこでは、他者への恐怖や私怨、欲望、ローカルな利害対立と氏族原理などさまざまな要因が働いていた。また独自の資金源を背景に自由に活動し数々の残虐行為を行った民兵集団の実態も明らかにされている。さらに、少数の民兵たちの活動を可能にした理由として、彼らを受け入れた社会、殺し合いを傍観していた人々についても考察し、「普通の人々」が恐怖によって無口な傍観者となったことが示される。こうした分析から、著者は、ボスニア内戦がローカルな力関係によって生み出されたものであると指摘し、それを民族主義によって説明するのは間違っていると主張する。そうした説明は、複雑な現実を単純化するメディアのメカニズムによって一要素のみが肥大化された結果なのであり、内戦に民族主義のレッテルを貼ることは、むしろ戦闘的民族主義者の権力を強化することにつながってしまう。ボスニアで起こったことは、民族主義に起因する戦争ではなく、「カオスの民族化」だったのである。

### Ⅲ

冒頭でも述べたように、本書は、単にボスニア内戦の残虐行為の実態を明らかにするだけでなく、ボスニア内戦の本質、それを引き起こした要因について、明確なメッセージを読者に伝えることを目的としている。「あとがきにかえて」において著者は、それをこのように表現する。「本書で私が主張しなかったのは、ボスニア内戦を考察するにはジェノサ

イドの恐怖と3つの民族の文化的同一性を押さえることが肝要だということである」(401ページ)。

3つの民族の文化的同一性、そしてその産物としてのボスニア内戦における残虐行為の同質性は、上でみたように本書の中心となる第Ⅵ章において、多くの資料の綿密な読み込みにもとづく分析を通じて示されており、その主張はきわめて説得的である。読者は第Ⅵ章の記述を通じて、3つの民族勢力による残虐行為はその本質においてかなり共通しており、同質性がきわめて高いということを納得させられるであろう。

この指摘は、現地の研究動向に対する痛烈な批判を伴っている。評者も他の場所で指摘したことがあるが[久保 2007]、現地の研究者による虐殺の実態の研究は、自民族を被害者とする歴史観に裏打ちされたものがほとんどであり、自民族に対する虐殺の実態には関心を払うが、自民族が行った虐殺行為には無関心である。他の民族が自民族に対して行った行為は虐殺、民族浄化、あるいはジェノサイドと呼ぶべき、非難すべきものであるが、自民族が行った行為は正当防衛に過ぎないというわけである。セルビアについてこうした現象を分析したラメはこれを拒否症候群(denial syndrome)と呼んでいる[Ramet 2007]。こうした傾向はボスニアの3民族に共通してみられるが、このような視野狭窄的な立場に立つと、3つの民族勢力が行った残虐行為の同質性という結論を導き出すことができない。3つの民族の側の資料をバランスよく比較検討し、その暴力の同質性という点を明らかにし得たのは、本書の大きな貢献である。

さて、3つの民族勢力による残虐行為の質的な共通性については本書の分析で十分に明らかになったと評者は考えるが、量的な側面についてはどうか。この点については、さらなる記述・分析の余地があったように思われる。本書では、内戦による死者数については、第Ⅴ章の末尾に若干の言及があるが、民族別の死者数などの分析は行われていない。この点は、ボスニア内戦における残虐行為の全体像をとらえるために重要なだけでなく、ボスニア内戦の責任論とも密接に結びついている。ボスニア

内戦についてセルビア人の責任を最も重視する人々の多くは、質的にはセルビア人とボスニア人が同質の暴力行為をしていたとしても、量的には、少なくとも内戦当初は圧倒的な火力を誇ったセルビア人が多くのボスニア人を殺害したという点を指摘するからである。

本書でも指摘されているように、これまでに示されてきたボスニア内戦の死者数の推計には大きな幅があり、信頼できる数字がなかったことが、ボスニア内戦の死者数の量的分析を困難にしてきた。しかし、ボスニアで近年、内戦による死者のデータベースを個人レベルで作成することによって内戦の死者数を正確に特定するというプロジェクトが進められ、ボスニア内戦による死者数は約10万人であったという理解が現地や欧米のユーゴ研究者の間で新たな定説となりつつある<sup>(注1)</sup>。このプロジェクトの調査結果を用いると、内戦による死者数の民族別分布など

を分析することが可能である。

紙面の制約からデータの詳細を紹介することはできないが、ここでの論点に関連するところだけ簡単にみてみよう。表1は、ボスニア内戦における死者数を民族ごと、年ごとに示したものである。これによると、ボスニア人は死者総数の60パーセント以上を占めており、その傾向は内戦が本格化していた1992年から95年までの時期において一貫している。ボスニアの民族構成は1991年の国勢調査でボスニア人(ムスリム人)43.7パーセント、セルビア人31.4パーセント、クロアチア人17.3パーセント、その他が合計7.6パーセントであったので、ボスニア人の被害は他の民族に比べてより甚大だったことがわかる。

さらに表2は、各民族の死者の内訳を示したものである。セルビア人、クロアチア人において戦死者の7～8割は軍人であるのに対し、ボスニア人の場

表1 ボスニア内戦における年別・民族別の死者数 1991-1996

	総計	死亡時期						
		1991	1992	1993	1994	1995	1996	不明
ボスニア人	64,036	91	30,442	11,775	5,933	13,987	11	1,797
	65.88%	17.77%	67.48%	61.56%	61.80%	72.33%	68.75%	51.31%
セルビア人	24,905	365	11,157	3,731	3,148	4,970	4	1,530
	25.62%	71.29%	24.73%	19.50%	32.79%	25.70%	25.00%	43.69%
クロアチア人	7,788	53	3,242	3,531	488	357	1	116
	8.01%	10.35%	7.19%	18.46%	5.08%	1.85%	6.25%	3.31%
その他	478	3	269	92	31	24	0	59
	0.49%	0.59%	0.60%	0.48%	0.32%	0.12%	0.00%	1.68%

(出所) 調査・記録センターの調査結果より筆者作成(本稿の注1を参照)。

表2 各民族別の死者の内訳(民間人・軍人)

	ボスニア人	セルビア人	クロアチア人	その他
民間人	33,070 51.64%	4,075 16.36%	2,163 27.77%	376 78.66%
軍人	30,966 48.36%	20,830 83.64%	5,625 72.23%	102 21.34%

(出所) 調査・記録センターの調査結果より筆者作成(本稿の注1を参照)。

合には死者の半数以上を民間人が占めていて、ボスニア人においては民間人の死者の割合が他の民族に比べて極端に高いことがわかる。内戦における残虐行為の対象は民間人に限ったものではないとしても、民間人の死者数が内戦での虐殺行為の規模をとらえる重要な指標であるとすれば、この点においてやはりボスニア人が受けた被害は他の民族をはるかに凌駕しているといえる。これは、火力の点でセルビア人、クロアチア人に劣っていたボスニア人が内戦において不利な立場に立たされていたという一般的理解が誤りではないことを物語っている。

このようにみても、ボスニア内戦の暴力行為について、3民族間の量的な不均衡性という側面が浮かび上がってくるように思われる。評者はボスニア内戦の発生と内戦中の残虐行為についてボスニア人の責任がないとは決して考えていないが、このデータは、残虐行為によって受けた被害の規模という点では3民族を同等に扱うのは必ずしも適切ではないということを示しているように思われる。著者はこの点についてどのように考えているだろうか。

つぎに著者の掲げるもうひとつの主張である、「恐怖」の重要性について検討してみたい。これまでも旧ユーゴの内戦、武力紛争を引き起こした要因のひとつとして「恐怖」を指摘した論者はおり[たとえばJovic 2001]、著者の主張それ自体は決して突飛ではない。しかし、本書の議論からは、著者が「恐怖」という要因についてどのように考えているかが必ずしも明らかではなく、その意味で、もっと立ち入った分析を示す余地があったのではないかと評者は考えている。どういうことか、以下で詳しく述べよう。

本書の分析においては、2種類の「恐怖」が存在するように思われる。ひとつは、第2次大戦中の「ジェノサイド」の記憶が喚起されたことで住民に生じる不安、恐怖である。第V章で著者が明らかにしているように、それは、過去の忌まわしい記憶を呼び起こそうとする政治エリートによる意図的なキャンペーン、情報操作によって喚起された不安、恐怖であった。第VIII章では、民族主義者のジェノサイド・キャンペーンを信じ込み、恐怖に駆られて武装集団

に参加した人々がいたことが指摘される。この場合も、たしかに個々の残虐行為を駆り立てていた要因としては恐怖が重要だが、より根本的な要因は、人々を不安、恐怖へと陥れたエリートによるキャンペーンであったといえることができる。

2つめは、具体的な報復・殺害の恐怖である。第VIII章のヴィシエグラードの事例において示されたように、数の上でははるかに多数にわたる一般市民は、少数の無法者である民兵集団に対して何も行動を起こさず、民兵行為による残虐行為が野放しにされた。何か行動を起こせば民兵行為によって報復され殺されることを恐れた一般市民は、何も行動を起こさなかったのである。この場合には、「恐怖」は、殺し合いの「傍観者」を生み出す重要な要因であった。しかしここでも、著者は、民兵集団の残虐行為を現地の権力者が黙認し、積極的に利用していたふしがあることを指摘している。とすれば、ここでの恐怖もまた、政治エリートによって作り出されたものという側面をもつといえる。

このように考えてみると、著者の分析において、「恐怖」は、いずれの種類の場合でも、政治エリートによって意図的に作り出されている側面が強いようにみえる。にもかかわらず、著者があとがきで「ジェノサイドの恐怖は、国際法廷でセルビア人の被告や弁護側が強調していることであるため、これまで、あまり注目されてこなかった—(中略)—加害者がどういう動機で、また、どういう条件によって犯罪を実行したのかを見極めなければならない」と述べて恐怖の重要性を強調するとき、そこには、恐怖を意図的に喚起して自らの政治目的に利用しようとする政治エリートの問題があまり念頭にないように思われるのである。著者は第V章冒頭で有名なブラヴシッチの証言を引用している。この言葉は、第2次大戦中の記憶、そこから喚起される恐怖が、(自身を含む)エリートの行動を駆り立てたと主張している。我々はこの言葉を額面通り信じるべきなのであろうか、それとも自己目的のために人々の恐怖を駆り立てたエリートを非難すべきなのであろうか。本書の分析からは、この問いの答えは明確ではない。著者は、「恐怖」という要因を、それを喚起しよう

とするエリートが存在という問題との関連でどの程度重視し、両者の関係の性質がどのようなものであったと考えているのか。この点について、今後著者によってより詳細、明確な分析が示されることを望みたい。

最後に、本書の副題にもなっている「グローバリゼーション」について。本書はボスニア内戦を「グローバリゼーションの戦争の第一幕」(397ページ)と位置づけている。ここで強調されているのは冷戦から「グローバリゼーション」への「転換」である。さて本書を紐解くと、内戦勃発の重要な引き金となったユーゴの経済危機は、(1) 第2次大戦後にユーゴが東西の間で独自の地位を確保し、はやくから西側と経済関係を拡大させ、先進国から借り入れて途上国へ輸出するという世界経済の構造的役割を割り振られたこと、(2) その西側が第2次オイルショック以降に不況に陥り、短期資本の流入の停止や輸出凋落に結びついたこと、(3) 社会主義ユーゴの経済体制の構造的欠陥、などの諸要因が結びついて生じたものであったと論じられる。しかし、これらはいずれも、冷戦崩壊よりも前に起きた現象である。ボスニア内戦を含むユーゴの内戦の重要な要因のひとつが深刻な経済危機であることは本書の議論からも明らかであるが、本書の分析からは、冷戦からの「転換」によって起こった「グローバリゼーション」とはそもそも何だったのか、それがいかにしてボスニア内戦と結びついているのかは必ずしも明らかではないのではないか。ボスニア内戦がいかなる意味で「冷戦からグローバリゼーション」への転換の帰結であったのか、著者が今後の研究のなかでより明確に示してくれることを期待したい。

こうした若干の疑問は残ったが、膨大な資料を駆使して、ボスニア内戦における暴力がさまざまな諸条件の絡み合いによって引き起こされたものであったことを具体的・説得的に示し、ボスニア内戦は単なる「民族間の紛争」だったのではなく「カオスの民族化」であったと結論づけたのは見事である。近年の紛争研究では、紛争を「民族紛争」と理解すること自体を問題視する潮流が形成されつつあり、紛争に参加するアクターが武器を取る際にもつ非常に

多様な動機を無視して「民族紛争」という枠組みを外部から押し付けることを批判する論者[たとえば Kalyvas 2003; 2006など]や、ある暴力を「民族的な暴力」と解釈する当事者や分析者の理解(フレーミング)の重要性を指摘し、民族の亀裂が紛争をもたらすのではなく紛争が民族の亀裂をもたらす点を強調する論者[たとえば Brubaker 2004など]が現れている。本書は、こうした紛争研究の潮流と合致したものであり、ボスニアや旧ユーゴといった地域に関心をもつ読者だけでなく、現代世界の内戦・武力紛争に関心をもつすべての読者に読まれるべき重要な研究である。

(注1) 英国・ケント大学のビーバー(Florian Bieber)博士との面談、ロンドン、2007年10月3日。ただしこのプロジェクトによる死者数は戦闘行為に直接起因する死者の数であり、自然死、事故死、医薬品の欠如や飢えに起因する死亡など、戦争が間接的な原因となっている死者は含まれていないことに注意が必要である。このプロジェクトの調査結果は、サラエボの調査・記録センター(Research and Documentation Center)のウェブサイトからダウンロードできる。下記のURLを参照。<http://www.idc.org.ba/>(2008年9月30日閲覧)。

## 文献リスト

### <日本語文献>

久保慶一 2007. 「事実、説明、責任、政策——旧ユーゴスラビア紛争をめぐる欧米の論争状況——」『国際政治』148号 133-142.

### <英語文献>

Brubaker, Rogers 2004. *Ethnicity without Groups*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Jovic, Dejan 2001. "Fear of Becoming Minority as a Motivator of Conflict in the Former Yugoslavia." *Balkanologie* 5(1-2): 21-36.

Kalyvas, Stathis N. 2003. "The Ontology of 'Political Violence': Action and Identity in Civil Wars." *Perspec-*

*tives on Politics* 1(3): 475–494.

—— 2006. *The Logic of Violence in Civil War*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ramet, Sabrina P. 2007. “The Denial Syndrome and Its Consequence: Serbian Political Culture since 2000.”

*Communist and Post-Communist Studies* 40(1): 41–58.

(早稲田大学政治経済学術院准教授)